

■有明海 東よか干潟 シギ・チドリ観察会 4月23日(日)

本日の担当：納家 仁、荒木涼子

(本日のスケジュール)

午前9時 JR「佐賀」駅前集合 昼食の弁当を各自用意してください。

タクシー2台(ジャンボタクシー1台、普通タクシー1台)に分乗(料金は人数割で片道一人900円程度)して、現地9時30分頃着 ビジターセンターで長靴レンタル(1日300円)後、ビジターセンター前から観察開始。

満潮10:39 潮位5.1m この時間帯が鳥との距離が一番近く100から150m程度干潟が残った状態。満潮から1時間~2時間程度は鳥が観察しやすい。それ以降は潮が引きすぎて鳥が遠くなる。

午前中約2時間半 シギ・チドリなどの水鳥を観察

12時~ 昼食タイム ビジターセンターの見学

13時~ 干潟の生き物観察 鳥との距離が遠くなるので、干潟の生き物を観察

14時~ 鳥合わせ まとめ

14時30分 タクシーに分乗して「佐賀」駅に移動 15時「佐賀」駅前で解散
(佐賀駅~東よか干潟への移動途中には、カササギに出会えるかも)

東よか干潟ビジターセンター「ひがさす」

・「鳥学界の至寶 榎本佳樹翁」安部幸六※「野鳥」1942年(昭和17年)10月号 ※福岡の野鳥研究家

有明海の干潟に立往生

・忘れもせぬ前記昭和十二年四月十二日、榎本、森田両氏と都合三人で、縣水産試験場有明支場の船で沖端村(おきのはたむら)の入江を出帆したのは午前七時半であった。鳴・千鳥の群れを追ひながら此地方で一番多く集るといふ、佐賀縣犬井道(いぬいどう)沖に着いた時は早や十時であった。三人ながら双眼鏡を出して頻りに鳥を覗いて居ると、何時の間にか潮はたちどころに退いて、見るみるうちに一面数溼の干潟となつてしまった。

さあ、船は一艦も動かない。船頭に聞くと晩の九時頃迄は潮が来ない。(中略)已むなくここに腰を据えざるを得なかった。夫でも頭上には鴨、鴨、千鳥、鷺の類が訪れ、船の前後には鳴千鳥の大群が黒胡麻を散らした如く、蒔いた如く降りては餌を漁り又飛び出し、代る代る来るので、榎本氏は一々其鳴聲に就て、或は飛び方により或は習性から吾々に其種目を説明して下さるので、之に興じて鳥談は益々賑ひ、時間の経つのも忘れて居た。斯くして有明海の陽も雲仙岳の彼方に落ち月明に飛ぶ水禽もあり、談は又はづみ何時しか時間も経過し船底を洗ふ波音に驚き時計を見ると午後九時少し前であった。三人胸を撫ぜ、やれやれ之から柳河の宿に帰られると喜んだ。嗚呼此十一時間こそ記念すべき長時間であった。夫でも榎本氏の鳥の話に左程に退屈さを感じなかった。而して吾々が鳥類識別上最も厄介とする鷺鷹目、さては此鷓型目に就て斯くも造詣深きかと今更ながら驚歎した譯で、所謂(いわゆる)鳥学界の至寶と称する所以蓋(けだ)しここにありと云う譯である。(後略)

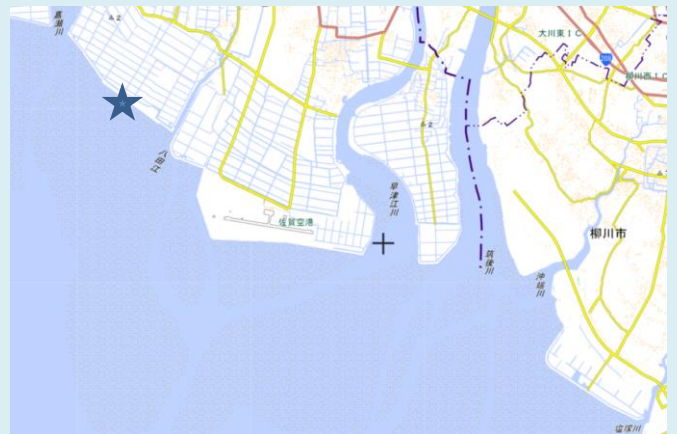
・今から86年前の1937年4月に榎本佳樹や森田初代大阪支部長といっしょに有明海の干潟(東よか干潟)に探鳥に出かけ干潟に立往生しながらも、しっかりとシギ・チドリの観察を楽しんだ様子を安部幸六氏が振り返り野鳥誌に寄稿されたもの。

我が国最大のシギ・チドリの飛来地を訪れ、榎本の見た当時の有明海の干潟や鳥たちに思いをめぐらせよう。

沖端村(おきのはたむら：現在の福岡県柳川市)の入江から船を出して、佐賀縣犬井道(いぬいどう：現在の佐賀市川副町犬井道)の沖で探鳥(下図赤丸あたり)



1940(昭15)測量の地図



現在の地図 ★印 東よか干潟



写真提供：橋本宣弘さん

■東よか干潟での観察の参考となるもの

- ・佐賀県支部のホームページの「東よか干潟情報」

<https://www.yacho-saga.org/>

- ・東よか干潟ビジターセンターのホームページ

<https://www.higasasu.city.saga.lg.jp/>